



## 横山 信毅 氏の 急 逝 を 惜 む

大倉土木株式會社專務取締役横山信毅氏は五月十八日滿州國よりの歸途、腸チブスの爲に京城大學病院に於て急逝された。享年五十九歳である。

横山氏は我國の土木實業界に生れた先覺的な巨人であつた。突然の朴報に接して我等もまた驚愕衰惜の情に堪へない。

横山氏は茨城縣の人で、土木界に入る端緒は近藤博士の攻玉社工學校に學んだのに因る氏の濶達なる性格は若くしてすぐに此の男性味に富んだ業界を選んだのであらう。而して横山氏の一生は修養と奮闘の連鎖であつた。即ち近代稀なる良き土木人たり得たるもまた當然と言はざるを得ない。

横山氏は土木業者としては實に珍しい程の人格的特長の多くを有した人であつた。

× × ×

第一に氏は雄辯家であつた。一般に土木方面の技術家とか業者とかは辯論にかけては全く他の専門階級に及ばないのであつたが、横山氏在つて初めて我が土木界は其代表的の雄辯を得たのである。所謂座談とか口先のうまい人は澤山あるが、横山氏のは眞に自分の理想と信念とに燃えてゐるのであるから、何等のトリックもない、危辯もない、常に正々堂々の論陣を張つて、人をして眞理に導き入れると言ふ有様であつた。而して其用語と言ひ態度と言ひ、口調と言ひ何れも立派なものであつた。

第二に横山氏は技術的研究心の強い人であつた。工事畫報社が六年前にコンクリート工事の基本智識號を特輯發行した時に、氏は大

倉土木會社の名の下に百五十冊の申込をして來た。而して社員關係者に之を配布してコンクリート工事の合理的施工に非常に努めたものである。コンクリートばかりではない、工事上何か参考になる事、又は施工上有利な研究とか發見とかあると氏は時間の許す限り之に心を向けてをつた。而してそれは必ず自分一人でなく自分の會社の社員全體に普及させ、業界にまで普及させて居た。恐らく氏の理想は日本全體の工事の事も考へてゐたのであらうと思はれる。

第三に氏は他人の世話を良くしてゐた。大倉土木會社には土木部と建築部とが在り何れも日本の業界に大なる仕事をして行つてゐるのである。従つて其所には博士あり、學士あり、老若多數の技術家及事務方面の人が夫々の分擔に働いてゐるのであるが、横山氏が此等多數の會社關係者を完成に統轄して圓滿に事業を進めてゐたのは一に氏の人格の力である事は勿論であるが、常に人を見るの明に長じ、適材を適所に入れた所以でもあると思はれる。局外者から見ると其必要を疑はれる様な人物をも氏は一度依頼を受けると其人の適所を見付けてゐた。横山氏は陸軍中尉として在郷軍人會の役員にも推され、實業士友會と稱する實業關係將校團體の常任理事もやつてゐる程で、各方面から人の世話を頼まれるが、大概は之を拒絶する事なく何等かの方面へ採用し、又は周旋してゐた。其の他人の爲に勞を惜まぬ點は多忙なる實業家としての氏の日常に於て實に敬虔に價するものである。

第四に横山氏は各方面の團體の爲に犠牲的努力を拂つた。現在の土木業協會とか、建築業協會とか、日本土木業組合聯合會とか其等は何れも横山氏が何れか重要な役割を有し、幹部として又中心人物として働いたのであるが、特に團體的の改善進歩に目的を置いて努力した事は氏の人物の公明なる反影であると思はれる。軍部關係の團體、學校關係の團體、

或は滿州に於ける事業團體、其他の實業團體等に對しても氏の存在は常に其等の第一線に何かしら指導的の刺戟を與へてゐた様である

× × ×

横山氏が大倉土木會社に於て頭角を現はしたのは氏が大連出張所に働いた當時である。元より最初の無名の一現場員から其所に至るまでの氏の眞劔眞面目なる努力は多大なものであつたが、他人の避ける様な難局にも自ら進んで當り、特に滿州に於ける氏の活動は實に献身的なものであつた。

斯んな事を一々書たて、居たら氏の長所は際限がない程である。

大倉土木會社の實權を委ねられてゐた横山氏は、それ丈でも非常な仕事の分量である。内地はもとより滿鮮臺灣各地に及ぶ大倉土木本社の事業を統轄して、益々之を發展せしめ大倉土木の名を今日の如く重大ならしめた勞は實に多大なものであるが、其間に於て又社會的に對外的に多大の活動をしてゐるのである。而して其活動が殆んどすべて國家的に大なる寄與をなすつゝあつたのであるから、此の精力の絶倫なるも又異常と言はねばならぬ

要するに此等の因をなす横山信毅氏の人格は、既に々々青年時代から日々不斷の精神的修養と努力との蓄積によつて出來たものであつて、氏の偉大なる體格と云い、明哲なる頭腦と云い、眞理に徹する雄辯と云い、職分に對する責任感念と云い、先輩を敬し後進を愛するの情操と云い、其等が良く調和して氏の熱の如き實行力に進められて行つたのである

あれ丈け健康であつた氏が五十代で逝去したのは實に不思議であるが、東奔西走殆んど席温まる間のない氏としては滿鮮の旅中に大往生した事が却つて本懐であつたかも知れない。氏もまた一種の英雄的義人であつた、非常時日本の青年に對し氏の靈は今や何事をや力強く叫んで居るであらう。

(昭和六年六月十六日)